

図2 援助例（色水遊びの場合）

（5歳児／7～9月頃）



最初は、保育者のまねをして、葉っぱをすりつぶして色水を作る

援助

他の葉っぱや花、草の実を用意しておき、子どもが気づくような環境をつくる

学びの芽生え

- 興味** ・保育者が葉っぱや草の実をすりつぶしているのに興味をもつ
- 気づき** ・葉っぱをすりつぶすと、色が出ることに気づく



さまざまな素材を使って、異なる色の色水作りを楽しむようになる

援助

色水を混ぜると、異なる色になることに気づくようにし、この気づきに共感する。ペットボトルなどを多く準備する

学びの芽生え

- 興味** ・葉っぱだけでなく、花の実にも興味が広がる
- 気づき** ・他の材料を使うと、別の色ができるとに気づく



色水を混ぜて、いろいろな色を作って遊び始める

援助

子どものつぶやきを周囲の子どもにつなく、また、別の遊びに発展させていく（和紙染めやジュース屋さんごっこなど）

学びの芽生え

- 自己調整** ・自分の好きな色を作るために、各色水の量を加減して混ぜるなどの工夫をする
- 気づき** ・色水を混ぜると、別の色になることや同じ色でも濃淡があることに気づく
- ・自分の色水を友だちに見せて、気づきを伝え合う



色水遊びから発展して和紙染めを楽しむ

学びの芽生え

- 興味** ・色水作りから和紙染めに興味が広がる
- 自己調整** ・好きな色に染めるために工夫し、うまく染まらなくても根気強く取り組む
- 気づき** ・予想と実際の違いに気づき、不思議さを感じる
- ・和紙に色水が染みる不思議さを感じる。

密接に関連します。例えば実をすりつぶしたら、「こんな色になった！」という発見が気づきです。気づきがあると、それを言葉にして友だちや先生に伝えたいくなります。気づきやコミュニケーションを繰り返す中で、思考は深まるのです。

ここで強調したいのが、学びの芽生えは遊びの中でしか経験できないということです。ですから、小学校への準備教育だけでも、逆に単に遊ばせるだけでも、幼児期の教育としては不十分です。保育者に最も求められるのは、学びの芽生えを促すことを強く意識しながら遊びの援助をすることなのです。

小学校での学びは、中学校や高校、大学、そしてその後の人生へとつながっていきます。その出発点になるのが幼児教育であることを認識し、学びの芽生えを育てる援助を実践していただければと思います。

現場のみなさんへ

幼児教育の潜在的な価値は、まだまだ世の中に十分には伝わっていないと感じます。学びの芽生えが注目されている今は、幼児教育の本当の意味を伝えるチャンスといえます。これまでに幼児教育が取り組んできたよい部分を、さらによくするという気持ちで、自信をもって子どもに接してください。

てから、算数の問題を解くのも、生活科で町を探検するのも、おもしろいと感じるようになります。

「自己調整する力」とは、集中したり、根気強く取り組んだり、工夫したり、ときには我慢して先を見通しながら自分をコントロールし、今

の遊びをつくっていく力です。この力は、長期間の活動をコツコツと続ける中で育ちます。特に、5歳～7歳の時期に育てることが重要で、十分に育たないと、小1プロブレムが起りやすくなると考えられます。

「気づき」は、思考力の芽生えと

理論編 2

インタビュー

保育者の「遊びの見通し」が「学びの芽生え」に結びつく

学びの芽生えを促す援助に決まったかたちはありません。必要なのは一人ひとりの子どもの状態に合わせた柔軟なサポートです。援助を行ううえで、園全体で共有したい考え方や具体的な実践方法について、「幼小接続会議」の副座長を務めた東京大学の秋田喜代美先生にうかがいました。



学びに向かうきっかけは大人も子どもも同じ

幼児期の子どもは、どのようなきっかけによって「学び」に向かうのでしょうか。私は、子どもも大人も大きな違いはないと考えています。例えば、大人が、毎日同じ料理をルーティンワークとして作るだけなら、何も考える必要はありません。しかし、ふだんとは食材を変えてみたり、お客さんをもてなしてみたりといったきっかけで、工夫しようという気持ちが生まれます。子どもも同じで、遊びの中から生まれたきっかけを育てていくことによって、初めて学びが生まれるのです。

しかし、大人にも、常に学び続けようとする姿勢をもつ人もたない人がいます。これは、幼児期に十分な「学びの芽生え」を経験し、それが小学校以降の学びへとつながったかどうかが大きく関係するものと思われます。

生涯学習の基盤として世界的に注目される幼児教育

1990年ごろから、「保育の質の効果」、そして幼稚園から高校までの「教育課程の一貫性」について、アメリカやイギリスなどを中心に議論が盛んになりました。背景には、幼児期の学びがその後の人生に多大な影響を及ぼすという考えが広く知られるようになったことなどがあります。幼いころから「わからないことを調べたい」という気持ちが育っていれば、例えば、大人になったときに自分から健康に関する情報を調べて健康管理に生かすなど、さまざまな場面で新しいものを取り入れて自分の生活をより豊かに、より幸せにすることができます。そのように、生活者として学び続ける生涯学習の基盤として幼児教育が重視されているのです。



東京大学大学院教育学研究科教授 秋田喜代美

あきた・きよみ
東京大学大学院教育学研究科教授。「幼小接続会議」副座長。専門は保育学、発達心理学、教育心理学、教師教育。著書に、『保育の心もち』『保育のおもむき』いずれもひかりのくになど。

図1 幼児教育と小学校教育の違い

幼児教育

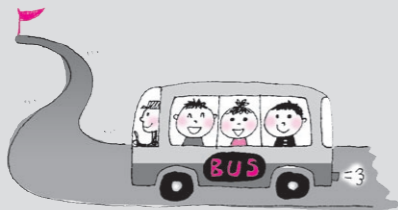
一人ひとりのペースに合わせて散歩するイメージ。目的地に到着することより、途中でさまざまなものに関心を抱くことを重視。



個々の子どもの個性を重視し、自由な遊びの中で「学びの芽生え」を促すことを目指す。

小学校教育

全員が同じバスに乗って、決められた目的地に時間通りに到着するイメージ。



最低限必要な知識・技術などを身につけるために、すべての子どもが共通の目標に向かって学ぶ。

幼児期の学びの芽生えは、幼児教育と小学校教育の違いをイメージするととらえやすくなるでしょう。小学校教育は、すべての子どもが電車やバスに乗って決められた目的地に時間通りに到着するようなイメージです。窓から景色を眺めるなど、多少の行動の自由はありますが、基本的には集団で同じ方向に進んでいきます。

一方、幼児教育は、一人ひとりのペースに合わせた散歩です。「自分のペースで歩いた」という自信を付けたり、目的地への到着よりもその過程でさまざまなものに興味をもつことを大切にします。

ただし、散歩にも地図は必要です。どのような方向に育ってほしいかという地図を保育者がもち、子どものペースに合わせて導いていく必要があります。その意味では、保育者には、子どもの育ちを俯瞰的に見る「タカ目」、そして子どもに寄り添う「アリ目」の両方が必要

と言えるでしょう。

子どもが幼小の違いをスムーズに乗り越えていくには、保育者が小学校教育へのつながりを意識する必要もあります。そのためには、小学校学習指導要領を読んだり、小学校低学年の授業を見たりすることも大切になります。

学びを促す援助の基本は「関心」のありかを知ること

では、学びの芽生えを促すために、保育者はどのような援助をすればよいのでしょうか。これは、どのようなときに学びが起きるのかを理解することが基本になります。

そもそもこの時期の子どもは、小学校以降のように「 をきなさい」といった保育者の言語的指導で学ぶのでしょうか。確かに、そういう場面もありますが、それでは学びの芽生えを促すことはできません。保育者の援助を通じて「もの・ひと・

こと」に深くかかわる中で、子どもは「自ら」学ぶのです。

例えば、昆虫を見つけたとき、保育者が「図鑑で調べよう」と促すのは、よく見られる援助です。子どもが昆虫の名前を知りたがっているのなら、それでよいと思います。しかし、「石の下にたくさん虫がいる」「同じ種類なのに大きさが違う」といった点に関心があるのなら、それらを探求していくための援助によって、子どもは昆虫とより深くかわり、学びの芽生えが促されます。つまり、子どもの関心のありかを捉えることが、学びの芽生えをうながす出発点になるのです。

ただ、学びのきっかけは保育者が意図した通りに起こるとは限りません。静電気で体にビニールがくっつくことに気づいた子どもがいるとしましょう。こうした瞬間は、学びの芽生えを促すチャンスです。保育者がそれを見逃さずに一緒に働きかけたり、別の素材で試すように促すことで、偶然のきっかけが学びにつながっていくのです。

安心できる環境の中で「広げる」「深める」

次に園における環境づくりの2つのポイントを説明しましょう。

1つめは、ふだんから大切にされているとは思いますが、学びの芽生えを促すうえで、一人ひとりの子どもが、保育者や仲間から「自分は認められている」という安心感を抱け

る環境は不可欠です。子どもは、不安があるうちは、決して学びに向かないからです。

そして2つめは、活動を「広げる」「深める」という視点を園全体で共有することです。「広げる」は、ひとりの遊びを仲間との遊びになげたり、異なる環境や素材で試したりすること。そして「深める」は、保育者がつねに活動の見通しをもって、子どもとともに考えて次の一歩に展開させていくことです。

例えば、積み木遊びでより高く積みたいという子どもの関心を支えるのは、「深める」援助です。こうした援助により、子どもは「土台が大きくなると不安定になる」などと学び、活動は深まっていきます。一方、積み木で作った建物を駅に見立て、ほかの子どもとともに電車ごっこをするように導くのは「広げる」援助と言えます。2つの援助ははっきりと分けられるわけではありませんが、保育者が違いを意識して場面に応じて援助を使い分けることで活動を展開させやすくなります。

そのために必要なのが、保育者が「遊びの見通し」をもつことです。これは、例えば、牛乳パックでイカダを作る活動で、「どれくらいの大ささを作れるか」「イカダを使って、どんな遊びができるか」といった次の展開の見通しをもっておくことです。保育者が子どもの発達段階や遊び・生活経験などを踏まえて遊びの展開を見通し、複数の援助を想定しておくことで、活動の「広がり」や「深まり」がうながされます。

「学びの芽生え」を促す援助のポイント

1. 「周囲から認められている」という実感をもたせる
子どもは心に不安を抱えていると、学びに向かいません。一人ひとりの子どもが保育者や仲間から「認められている」と実感できる環境を整えましょう。
2. 遊びを「広げる」「深める」という視点をもつ
子どもが遊びこめるように、ほかの子どもなどに「広げる」、1つの活動を「深める」という2つの視点をもち、場面に応じて援助に取り入れましょう。
3. 保育者が「遊びの見通し」をもつ
発達段階や遊び・生活経験などを踏まえ、「どのように展開させるとよいか」という遊びの見通しをもっておくことで、先を見据えた援助になり、子どもの学びをうながしやすくなります。

保育の場面を共有した研修で遊びを見通す力を養う

しかし、経験の浅い保育者にとって長期的な遊びの見通しをもつのは難しく、目の前の子どもを追うだけの援助になってしまいがちです。すると、気になったことを、あれもこれもと指示するような援助になり、子どもが創意工夫をするチャンスが失われてしまいます。

一方、ベテランの保育者は「今は無理でも、半年後には自然に友だちと一緒に協力するようになるだろう」といった長期的な見通しをもつため、「今、指導しなくてよいこと」が見極められます。これは、学びの芽生えを促すうえで、とても大切なことです。

ですから、どの保育者も遊びの見通しをもてるような園内の環境づくりが求められます。若手の保育者がベテランの実践を見学したり、前年度の記録を確認したりすることは、活動の内容や子どもの育ちへの理解につながるでしょう。記録や写真、ビデオなどをともに活動の場面を共有し、保育者同士が、子どもの学びや援助について話し合う研修

も、遊びの見通しを養ううえでは有意義だと思います。

学びの芽生えを促す援助は、いわゆる早期教育とは本質的に異なります。保育者のみなさんは、子どもの中にゆっくりと育つきめ細かな芽を見つけ、育てていくという視点を大切にしてください。

現場のみなさんへ

園のみなさんが多忙であることはよく理解していますが、忙しさのあまり心の余裕まで失うと、子どもに対する要求が多くなってしまいがちです。「学びの芽」は、じっくりと子どもを見つめたときに見えてくるものです。心にゆとりをもって朝から笑顔で子どもを受け止められるように、あまり無理はせず、どうか健康にも気をつけてください。個々の保育者らしさ、園らしさを大切にしながら、「学びの芽」をはぐくんでいただきたいと思います。